

芸術大通信

京都市立芸術大学広報誌2012年3月

Vol.015

特集

東日本大震災災害支援チャリティオークション

サイレントアクトア

受賞者インタビュー

ピアノ 金田 仁美

教員インタビュー

陶磁器 森野 彰人

京都芸大で、日本の伝統音楽に触れる

雅楽の演奏風景、いまむかし ～琵琶篇～

リレーコラム

学長 建畠 哲

サイレントオークション

2011年3月11日に起こった東日本大震災は、人々に震災・津波による甚大な被害をもたらし、そのみならず原子力発電所の事故によって、大きな傷を東日本に残すこととなった。

私たちが美術に携わるものは、この悲劇を決して無視することはできない出来事として受け止めていた。しかし同時に、美術ができることの限界も理解せざるをえず、現状にやるせない焦りを感じていたことも事実である。ただ、それでも何か私たちが出来ること、かつ有効な支援方法を模索せずにはいられなかった。その結果が、サイレントオークションによる義援金獲得、というアイデアである。

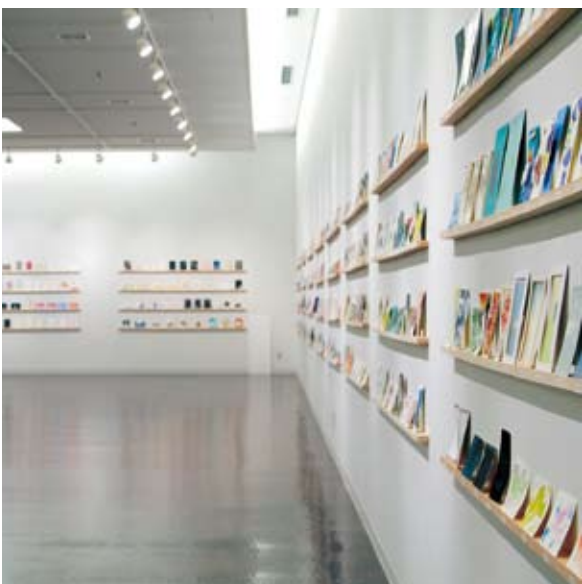
有名無名も関係なく、表現者の被災地に対する想いは同じはずである。この想いに賛同していただき、かつ普段は遠い世界であるオークションの醍醐味を一般の方々にも味わっていただくために、この形式のオークションが採用された。サイレント方式というのは、もともと英国王立芸術大学院(RCA)ロイヤル・カレッジ・オブ・アート)で行われていた、作家名を伏せた匿名方式のオークションに倣うもの

だ。京都芸大の学生、教員、OBなどに広く協力を呼びかけた結果、その趣旨に賛同し出展に応じたアーティストは346名。堀川御池ギャラリー内の大学ギャラリー・アークアには、866点の作品が集まった。

熱くて深い思いが、普段静かな会場をざわつかせていく。

会期は2011年7月5日(火)から7月10日(日)までの6日間。オークションは異様な熱気を帯びていた。もちろん被災地の支援という大目的

は了解されていただろうが、唯一参加作家のわかる出品作家一覧表(4ページ参照)を見て、もしかするとビッグネームの作家の作品を手に入れられるかもしれないという期待と興奮が、会場にあったことは否定出来ない。



午前11時。いよいよオークションが開始された。

その瞬間をギャラリー・アクアで迎えた建島学長は、平日にも関わらず足を運んでくださった大勢の人々を見て「正直ほっとした」と振り返る。WEB入札でも、開始早々サーバーがパンクするほどの入札が殺到するというトラブルもあったが、最低入札価格が3,000円とオークションにしては低額に設定されたことも功を奏して、全国から非常に多くの入札が寄せられた。サイレントアクアは、このオークションとしての意義はもちろんのこと、京都芸大の輩出する作家の素晴らしさを再認する機会となった。

オークションの運営を担当したギャラリー・アクアの学芸員の森山貴之は、「あえてここで震災復興支援という意義を離れて見てみると、作家名を伏せるというルールが、知名度の高い作家よりもむしろ若手作家あるいは学生にとって有利なものであったことは間違いない。また、作品を入札する側にとってみても、ネームバリューによらない、自分の審美眼にしたがって作品を評価出来るという意味で、良い機会だったのではないかとも思う。」と初めての試みを評価する。



予想を上回る反響をいただいたオークションの来場者は、6日間で1,109名、総入札数は2,279入札、落札点数は633点にのぼり、ウェブサイトへのアクセスも1万件以上あった。

その結果、落札総額は、5,748,365円。

サイレントアクアへのご参加を通じて、災害支援に寄せていただいた貴重なご芳志。その収益（落札総額）は、全額、京都市立芸術大学と京都市立芸術大学美術学部同窓会の連名により、京都新聞社社会福祉事業団を通じて被災地へ寄付させていただいた。

皆様のご支援、ご協力に心から感謝している。

ただ、震災支援は継続しなければ意味がない。サイレントアクアが成功を納め、またさまざまなメディアに紹介されるなどして反響を呼んだことで、オークションは芸術大学ならではの有効な支援策として認知されたのではないだろうか。京都芸大では、今年も9月に第2回サイレントアクアを開催予定である。2回目には、誰がどんな作品を出展してくれるのか。新たに誰が参加してくれるのか。そういった興味も含めて、私たちのできる範囲での支援を続けられればと考えている。



「サイレントアクア」 出展作家一覧 (50音順)

ア行	カ行	サ行	津崎 実	朴 賢京	三輪 小智子
青木 陵子	樫木 知子	サイモンフィッツジェラルド	辻本 洋子	日影 圭	村上 文子
赤沢 嘉則	片山 雅史	坂井 直樹	綱田 康平	比果 彩	村上 滋郎
赤松 玉女	桂 卓	坂井 由美子	椿 昇	東 明	村上 文子
秋定 和佳	門川 昭子	佐川 俊浩	鶴田 憲次	菱木 明香	村瀬 裕子
秋山 陽	角田 広輔	笹井 史恵	寺井 寿子	人長 果月	村山 春菜
浅野 均	金氏 徹平	笹岡 由梨子	寺島 みどり	百武 尚美	森 俊夫
安積 朋子	金田 勝一	佐々木 綾子	寺田 就子	平岡 あかり	森口 邦彦
安積 伸	叶 道夫	佐々木 知里	寺本 美波	ひろい のぶこ	森下 奈緒子
安宅 恵	上岡 奈苗	佐々木 ひろこ	出井 豊二	風能 奈々	森末 由美子
阿部 緑	神谷 紅	定家 亜由子	富元 秀俊	福岡 佑梨	森野 彰人
綾田 勝義	鴨井 陽香	さの あきよ	鳥井 雅子	福村 真美	
安東 菜々	河合 美佳	佐野 暁	砥綿 正之	福元 章子	ヤ行
池垣 タダヒコ	河崎 ひろみ	佐野 賢	土井 智美	藤崎 誠	安井 健二
池上 俊郎	川島 睦郎	澤村 春菜		藤澤 信輔	安井 友幸
池田 崇	川嶋 涉	塩入 ゆり	ナ行	藤野 靖子	ヤノベ ケンジ
井澤 茉莉絵	河野 愛	塩崎 優	内藤 英治	藤平 伸	矢部 奈桜子
石田 翔太	河股 由希	重松 あゆみ	直海 香	藤本 典子	山河 全
石原 友明	川村 善之	シニギワ マユゲ	中井 恒夫	藤本 秀樹	山崎 綾子
出口 義子	神野 友里	柴田 主馬	中井 貞次	藤原 隆男	山崎 隆夫
出原 司	閑林 宏祐	芝本 蘭子	中井 博恵	藤原 美紗子	山添 耕治
井手本 貴子	木内 ひとみ	下内 香苗	中岡 真珠美	古川 加津夫	山田 俊行
伊藤 彩	菊川 亜騎	集治 千晶	中路 規夫	古川 沙侑梨	山名 彩香
伊藤 存	菊池 啓二	城田 香菜子	中西 瑞季	古本 有理恵	山中 菜摘
伊東 宣明	岸 雪絵	新海 治	中ハシ 克シゲ	ベ サン スン	山中 晴夫
伊藤 学美	岸中 延年	新海 康子	中原 史雄	堀川 すなお	山部 泰司
伊藤 義明	岸本 志津	城野 愛子	中原 浩大	堀口 豊太	山本 千晴
稲垣 若菜	金 光男	杉浦 美佐緒	中原 史雄		山本 俊夫
乾 藍那	木村 秀樹	杉田 泉	仲摩 洋一	マ行	山本 史
井上 明彦	木村 英輝	杉本 昌之	中村 真紀	舞原 克典	山本 容子
井上 裕美子	木村 優里	鈴鹿 芳康	中村 潤	前川 紘士	山本 理恵子
井ノ岡 里子	桐月 沙樹	鈴木 周子	中山 明日香	前田 恭子	横井 裕子
今尾 栄仁	日下部 雅生	鈴木 ひかり	中山 奈美	前田 純	吉岡 佐知
伊村 望美	草間 彌生	鈴木 宏樹	中山 玲佳	前田 朋子	吉岡 千尋
上原 浩子	楠本 孝美	鈴木 八十二	長井 千佳子	増田 佳江	吉岡 俊直
確井 ゆい	國政 聡志	鈴木 佳子	永井 麻友佳	町田 藻映子	吉川 充
梅原 猛	國松 万琴	瀬戸 理紗子	長尾 浩幸	松井 亜希子	芳木 麻里絵
江原 佐保子	桑原 ゆうい	宗円 寿子	西川 礼華	松井 沙都子	吉田 孝光
江見 奈保	熊谷 誠	染谷 聡	西田 真人	松井 紫朗	吉田 典子
遠藤 彩子	倉智 啓子		西村 知子	松井 智恵	吉田 晴夫
大石 真論	栗本 奈央子	タ行	西村 祥子	松井 友恵	吉田 弘幸
扇 千花	栗本 夏樹	高井 節子	野崎 邦雄	松岡 悠子	吉松 知美
大河内 久子	黒川 彰夫	高石 瑞季	野嶋 革	松島 由香	寄神 くり
大島 成己	黒川 彰宣	高木 智子	野原 健司	松嶋 由香利	
太田 麻里	黒川 香織	高野 純子	野村 のぞみ	松田 啓佑	ラ行
大槻 緑	黒光 茂明	高橋 耕平		松田 朋子	任瑛彬
大西 伸明	黒宮 菜菜	高橋 悟	ハ行	松田 良介	六村 眞規子
大原 千尋	桑田 知明	高濱 豊	河 明求	松平 莉奈	Robert Platt
大山 幸子	公庄 直樹	竹内 敦子	橋本 知子	マツモト ヨーコ	
岡田 典子	鯉江 真紀子	竹内 佳奈	長谷川 直人	真野 岩夫	ワ行
岡田 美紀	小池 一範	竹中 健司	長谷川 由貴	丸田 洋子	若木 くるみ
岡本 知子	上坂 孝明	武部 翔子	畠中 光享	水野 収	渡辺 千明
岡本 実季	小財 有紀	立松 功至	服部 しほり	三獄 伊紗	渡辺 信明
小笠 美華	小清水 漸	田中 朝子	服部 春香	三橋 遵	王 いーてん
小川 久美子	児玉 太一	谷中 聡	英 ゆう	三宅 砂織	
奥田 一生	小西 熙	田澤 紗和子	羽部 ちひろ	宮崎 あゆみ	
奥田 輝芳	小林 紗世子	田畑 千秋	濱田 弘明	宮田 雪乃	
奥田 泰江	小林 千穂	丹 紅光	林 里恵	宮本 道夫	
小椋 淑恵	小柳 裕	茶之木 絵里	馬場 佳那子	宮本 佳美	
織田 みき	小山 格平	塚田 章	馬場 晋作	三好 彩	
小田 英之	権 貴玉	塚田 紀彦	朴 善化	ミルテン	
小田 友子		月本 ちしほ	Hyon Gyon	ミロスワフ パウカ	

教員と学生による震災復興支援の取組



“絆”をテーマに「いとへん展」を開催

織、紙、絹、縫、絆・・・これらの文字に共通しているのは“糸偏(いとへん)”。「いとへん展」は、京都の伝統的な糸偏産業のまち・室町にある「きらっ都プラザ」において開催された、芸術系6大学(京都市立芸術大学、京都嵯峨芸術大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、大阪成蹊大学芸術学部、成安造形大学)の学生によるデザイン作品展です。

昨年は、東日本大震災の支援を目的に「絆～ぎずな～」をテーマに掲げ、8月5日～8日にかけて開催されました。会場には、学生が染織

した布で作った着物の作品や、お互いに別のことをしながら空間を共有できる2人掛けの椅子“ren1”(京都商工会議所会頭賞受賞)などのテーマに相応しい作品など、大学のまち・京都ならではの学生の意欲的な作品が会場に並び、また、音楽学部学生の友情出演によるミニコンサートも開催されて、訪れた人を楽しませていました。

本展での学生デザイン作品の販売売上と、子どもを対象にしたワークショップ参加費を義援金として寄付させていただきました。

宮城県で開催した「手遊び(てすさび)カフェ」

染織、漆工、陶磁器、彫刻の各専攻の教員4名と美術学部全体から学生17名が、9月14日～20日の7日間、宮城県の仮設住宅や病院に「手遊びカフェ」を設置して、被災者がお茶を飲みながら、手遊びできるスペースを提供しました。

暇つぶしや気晴らし目的です。“手遊び”には、人の気持ちを和らげたり、その場に長く居続ける理由ができるという効果があります。

今回の「手遊びカフェ」は、作る行為そのものが持つ意味を問う工芸科の研究と、彫刻専攻が指導する学全学的な取組である緊急時の共有スペース“コミュニティ・カフェ”の研究が合体

したプロジェクトで、被災者が手遊びを通して情報交換や気分転換をすることで、ストレス軽減などを図ることが目的です。

「手遊びカフェ」には、人々が“何気なく”“暇つぶしに”集まってきてくれました。そして、7月の取組で宮城県女川町門前の仮設住宅全世帯にお送りした学生の手染めの暖簾に、インシヤルやワンポイントを染めたり、仙台市の御銅師(おんあかがねし)の田中善氏と一緒に、丸く切り抜いた銅の板を手で丸みをつけて重ねていく「SEND-AI(仙台・運ぶ愛)」銅のパラ作りなどを楽しみながら、カフェに用意した保存食、手作り食、自然食品など、今回の取組に沿ったメニューを味わっていただきました。



プロジェクトチームは、「一過性の取組ではなく、東北へとつながった糸が切れないう、細く長い活動を続けていこう」と継続的な取組を考えています。



学生作品のチャリティーオークションを実施

コンサートに向かう人たちのワクワク感を高めようと、京都市営地下鉄北山駅から京都コンサートホールに向かう地下通路に、「楽器」をテーマにした作品が数多く展示されています。これらは、京都市交通局、(財)京都市音楽芸術文化振興財団との連携により、デザイン科の学生が制作した作品です。

昨年9月に新しい作品への展示替えを行い、それまでの作品の返却が予定されていたところに、京都市交通局から、展示作品のチャリティー

オークション実施の提案をいただき、学生は、「自分たちの作品が復興に役立てるなら。」と喜んで賛同しました。

8月24日～31日に実施されたオークションは、多くの方に足を運んでいただき、30点の作品に対し、延べ77件の入札がありました。収益金は、デザイン科の学生の手で、京都新聞社会福祉事業団に義援金として寄付されました。

「震災チャリティーコンサート」への出演

被災地の日も早い復興を、京都から音楽にのせて願う「震災チャリティーコンサート」が、8月14日に京都コンサートホールで開催されました。出演は、京都市交響楽団、京都市立芸術大学、京都市立京都堀川音楽高等学校、京都市ジュニアオーケストラ。第一部の京都市交響楽団のステージでは、音楽学部教授でトロンボーン奏者の呉信一先生と有志学生が出演、コーポランド作曲の「市民のためのファンファレ」などを力強く演奏しました。第二部は、プロの演奏家から中学生までが混成で、京

都市交響楽団の桂冠指揮者である大友直人氏の下で一つのオーケストラを結成し、シベリウス作曲の「交響詩フィンランディア」などを熱演。大喝采のうちに幕を閉じました。

コンサートの収益金は「音楽の力による復興センター※」に全額寄付されました。

※「音楽の力による復興センター」は、震災後、公益財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団事務局内に設置され、演奏活動の資金を受け付けながら、直接被災地、避難所を訪ねてコンサートのボランティアを行っておられます。



写真提供：京都コンサートホール



チャリティーコンサート「メサイヤ」の開催

「東日本復興への想いをハレルヤコーラスに込めて」と題したチャリティーコンサートを、昨年に引き続き、12月10日に京都市立京都堀川音楽高等学校ホールで、音楽学部・大学院音楽研究科と京都新聞社との共催により開催しました。

よく知られたハレルヤコーラスは、ヘンデル作曲のメサイヤのクライマックス。その高らかな歌声は生きる喜びへの賛歌として、被災地の復興を祈る聴衆の心に響きました。

演奏会の収益は、京都新聞社会福祉事業団を通じて義援金として寄付されました。

日本人初 第2回フォーレ国際ピアノコンクール優勝

大学院音楽研究科博士課程1回生

金田 仁美

KANATA Hitomi



2月23日に青山パロックザール（京都市西京区）で開かれた受賞記念リサイタルで

—— 第2回フォーレ国際ピアノコンクールの優勝、おめでとうございます。前回（2009年）も本選に出場されていますが、今回はどのような気持ちで臨まれましたか。

金田 フォーレ国際ピアノコンクールは、フランス留学でお世話になっていたブルーノ・リグット先生の勧めで出場しました。このコンクールは、持ち時間1時間のプログラムを演奏するのですが、その間一度も無台袖で休むことなくずっと舞台に出続けるんですね。前回はCDによる予備審査をパスして本選には出られなかったものの、1時間舞台に出たというのは初めての経験だったのもあって、後半でバテて崩れてしまい、結果が出せませんでした。今年もリグット先生の勧めでエントリーしましたが、前回の失敗もあったので、結果はともかく出場してみても、もし本選にいけたら、今のベストを尽くそうという気持ちでした。

—— 今年、プログラムの構成も何か工夫されましたか。

金田 1時間に演奏する曲は10曲く



ブルーノ・リグット先生と



フォーレ生誕の地にちなんだ「ガブリエル・フォーレ通り」

（脚注）フォーレ国際ピアノコンクールは、作曲家フォーレ（1845～1924）の生地フランス南西部のパミエ市で開かれている音楽フェスティバルの一環として2009年に始まった。

—— 今回のコンクールの開催地、パミエ市の雰囲気はいかがでしたか。

金田 パミエは小さい街で、南仏特有の太陽がいっぱいって感じでした。空気が澄んでいるし、景色が美しかったです。このコンクールは、パミエで開催されている音楽フェスティバルの一環なのですが、街全体をあげてやっているという雰囲気だったので、熱気がすごかったです。コンクールで弾き終わった直後にも、聴いてくださったお客さんからも「すごくよかったから是非入賞してね」と外国人の私にわざわざおっしゃってくださいるなど、パミエの人

の温かさを感じました。

—— コンクール本番はどのような心境でしたか。

金田 いつも「どうなるかはわからない」と思ってた舞台に出て行くんです。時には「最後までいけるかな」とか弱気なことを考えてしまふこともありましたが、演奏する一曲一曲が自分の中で充実して弾けたと思うことが、次の曲に向かうエネルギーにつながるの、本番も、とにかく今弾いている曲に集中することだけを心掛けていました。

—— 審査員5人満場一致の優勝でしたが、ご自身の感触としてはいかがでしたか。

金田 結果の良し悪しは正直考えなかつたです。前回の後半にバテて悔しい思いをしたことのリベンジはできたかなと、ほっとしていました。

—— 優勝者としてお名前を呼ばれた時には。

金田 びっくりでした。会場では、海外の授賞式のセレモニーそのものが珍しくて、私自身が動画を撮ったりして他人事でした。4位（3位空席）、2位が呼ばれて。1位るときに自分の名前呼ばれてびっくりして慌ててカメラを落としました。

—— 実感がわいてきたのは。

金田 そのときには、頭が真っ白

という感じで。周りの方から「フェリシタシオン（おめでとー）」って言われてからでした。

—— 学部生時代に伸び悩む時期があったとお聞きしています。

金田 学部3回生の後期に、実技担当の岡田敦子先生が東京に移られることになったんです。それで、神谷郁代先生（京都芸大名誉教授）に引き続きご指導いただくことになったのですが、レッスンのスタイルがガラリと変わりました。今思えばお二人の先生にご指導いただいたことは、自分のためになったと思えるのですが、その時はやっぱり戸惑ってしまいました。

岡田先生は、理論を言葉で示してピアノに映していく理論派タイプの先生だったんですが、神谷先生は演奏家タイプの先生なので、言葉は多くないんです。だから、言われていることを自分で本当に噛み砕いて噛み砕いて自分で練習しなければいけない。理論的なレッスンに依存し過ぎていたのもあって、今までは組み立てられていたものが、急に放り投げられたような感じがしていました。結果的に、プロとしてピアノを弾いていく姿勢や心構え、意識を高く持つことなどを神谷先生の背中から学びましたので、今となってはすごく良かったと実感しています。だけど、ちょうどその時期の試験の成績も大学4年間の中では良くなかったりしたので、当時は自分では伸び悩んでいると思ひ込んでいま

た。

今の私には、それは必要な時期だったと思います。当時は目の前のことしか見えていないので、思うように弾けないということばかりに知られていました。

—— その時期は、時間的な解決以外では、どのように自らを成長させたのでしょうか。

金田 神谷先生自身が弾いて示してくださいの中から、先生の演奏は自分とどう違うのか、どこをどうすれば自分の音楽を向上させることができているのか、何か今の自分にもう少しできることはないのか、ということを見つめるように、先生の一言一音を聞いて、自分の栄養にしていきました。それまでに増して、鋭く耳を使うようになったと思います。

—— 成長していくうえで、京芸で良かったところはどんなところでしょうか。

金田 他の大学は人数が多く、学生同士のかかわりが薄いと聞きますが、京芸は少人数制で、人とのつながりが濃密なところです。演奏への取り組み方などを、みんなで色々と話し合えるので、学生同士のつながりが深く持てます。自分の担当以外の先生でも学生一人一人を覚えてくださっているのが、試験の後に講評をいただいたり、何気ないときでもお話ができます。学年や専攻の枠を越えて、先生と学生のつながりも強く、それが自分にとって非常に強いことでした。

—— 学部生のころから比べると、自身がピアノニストである意識することが多くなってきていると思いませんか。

金田 学外からお仕事として演奏の依頼がくるようになって、自分の演奏レベルでもプロを目指せるのではないかと、感じるようになりました。そこにつながってきたのは、大学のおかげでもあるんです。京芸のピアノ専攻は他大学に比べて伴奏の機会が多いんです。ピアノ専攻には1学年14人いるのですが、弦楽専攻、管・打楽専攻、声楽専攻もそれぞれ14人いますので、単純計算でピアノ専攻1人につき3人の伴奏を経験することになります。私はありがたいことに、学年を重ねるごとに、多くの方に頼んでもらえるようになって、3・4回生のときはいつも5〜6人担当している状態でした。

学部から修士になるにつれて、徐々に学生同士だけではなく、学外の方の伴奏も頼まれる機会が出てきました。伴奏という形で人から求められてピアノを弾く機会が増えて、まだまだプロを名乗るほどではないにしろ、学生気分は少しずつ抜けていきました。

—— 金田さんにとってピアノの魅力はどのあたりにありますか。

金田 音楽においては、たとえ5分間の曲であってもその中に、優しい表情があったり急に激しい表情が出てきたりという、日常の生活では起こらないような感情の起伏があります。すごくロマンティックなものが

出てきたかと思えば、奈落の底に落とされたような絶望的な感情が出てきたり、普段の生活の中では味わえないような感情の「動き」を音楽は体験させてくれます。そこが最大の魅力であり、ピアノという媒体があったから、自分はそういう体験ができています。音楽の中では様々な世界を生きられる、という魅力があります。



2月23日の受賞記念リサイタルで、現在の指導教員、坂井千春先生からアドバイスを受ける



金田 仁美 (かなた ひとみ)

大阪府生まれ。4歳でピアノを始める。

2011年第2回ガブリエル・フォーレ国際ピアノコンクールにて審査員満場一致の第1位(フランス・パミエ市)。第12回イルド・フランス国際ピアノコンクール第3位(フランス・パリ郊外)。第19回吹田音楽コンクールピアノ部門第1位。

藤岡幸夫指揮関西フィルハーモニー七夕コンサート2009～吹田音楽コンクール1位受賞者を迎えて～に出演。第25回記念アゼリア推薦新人オーディションに合格、現田茂夫指揮大阪センチュリー交響楽団(現日本センチュリー交響楽団)と共演。

京都市立芸術大学音楽学部を卒業。在学中、同大学主催のピアノフェスティバル、学内リサイタル、卒業演奏会等に出演。

これまで、井出穂子、山岡真弓、服部久美子、笠間春子、岡田敦子、神谷郁代、ブルー・リグット、坂井千春の各氏に師事。

現在、京都市立芸術大学大学院博士課程に在籍中。

優勝の賞状とブロンズ

第22回タカシマヤ美術賞受賞

森野 彰人

MORINO Akito



美術の新鋭作家に送られる第22回タカシマヤ美術賞を受賞した美術学部陶磁器専攻教員 森野彰人。2007年に京都芸大に就任以降、開催した個展・グループ展は16回を数える。精力的な作陶活動の一方で、大学内では専攻横断的な授業の実施にも力を入れていて、大学外でも他機関の研究者と京焼の研究を行ったり、地元清水焼団地での地場産業育成事業を行っている。

—— タカシマヤ美術賞受賞、おめでとうございます。

森野 ありがとうございます。タカシマヤ美術賞は、ノミネートされていることは知っていましたけれど、まさか選ばれないだろうと思っていたのでびっくりしました。陶芸の分野で取られている方も少ないし、僕が該当するようなものだと思うていなかったんです。

—— どのような部分が評価されたとお考えですか。

森野 陶芸の伝統にしっかりと立脚しながら、オブジェに限らず茶碗や花

瓶、食器まで幅広く創造的に創作活動しているところを評価してもらえたと思っています。ただ、僕は京都のやきもの屋の生まれで、「なんでもできな一人前やない」とまわりの職人さんが言われるのを聞いて育ってきたので、作る以上は土ものも磁器ものも、オブジェも器物も、なんでも出でて当たり前だと思っています。僕自身は、工芸は歴史の上にかに新しい仕事を創造していくかが大事だと考えています。

—— 森野先生にとって、作品とはどういうものですか。

森野 僕は、やきものは、「人の生活の中に入っていくって成り立つものだ」という考えがベースにあります。それは、器はもちろんです。オブジェも、展示会場で壁に掛けたり展示台に並べて終わりにじゃない。そういう特別な場所から離れて、もう一度、どこか人と交わる空間に設置した時に初めて完成なんです。だから、美術館やギャラリーに飾られている作品を見てもらえるなら、「自分の生活空間の中に置く

とどうか」という視点で見ただけなら、うれしいです。

—— 地元清水焼団地での活動を教えてください。

森野 僕の制作拠点は清水焼団地なんですけど、そこでは作品づくりだけでなく、これから先に京焼・清水焼をいかに残していくかという活動をしています。

やきものをはじめとして伝統産業界は、安い外国製品に押されたり、人々の生活様式の変化に応じた商品を生み出せずに疲弊してしまっている。京焼は、歴史文化都市・京都というブランドを持っているのと同時に、伝統という足かせに縛られている。現在、京焼・清水焼の「どこが素晴らしいか、どこが優れたものか」を明確に説明できないでいる。「手作りですから」なんて言葉は、それを現代の生活の中で使う消費者からすると何の理にもならない。時代が変わり、人々の生活が変化しているのだから、その中で使う食器も変わっていくのは当然です。一つ100円、300円の食器を「粗

悪品や、こんなもんあかん」って言っているも、消費者がそういうやきものを買い求めるから、市場に商品として溢れている。そんなことは、当たり前のことなんです。だから、そういった条件の中で、どういう風に自分を位置付けていくのかをしっかりと社会に説明していく必要がある。

僕は、この京都という場所、他の産地がないような新しい連携ができると考えています。大学と地場産業が、やきもの本質についての研究で連携したり、京都府立陶工高等技術専門学校、京都市産業技術研究所、ギヤラリー、問屋、小売りまで含めたやきもの関係すべてのデータを包括的に蓄積し、京焼・清水焼の創造的発展に役立つクリエイティブなアーカイブ機関を組織することなどです。

清水焼団地は、そういった新しい連携の中でデザインや社会の変化を学びながら、新たな商品を生み出し、産業としての継続性につなげていく。そうすることで、清水焼団地が社会の中で機能していける新たな組織として

誰よりも「やきもの」が好きで、 「やきもの」に詳しい人を育てたい。

発展していくことができ
るんです。
それから、伝統産業の衰
退は作り手の問題だけに
起因しているのではあり
ません。



そもそも、文化というものは、受け手があつて初めて育つものです。伝統産業は作り手だけでは生き残れないし成長もしない。顧客ニーズのない産業が衰退するのはどの分野でも一緒でしょう。国や自治体が伝統産業にどんな助成しようとするけど、本当に伝統産業を残したいのなら、作り手への助成など必要ない。助成事業ほど無責任な事業はなく、作り手のエゴを助長して顧客ニーズとの溝を深めるだけなんです。それよりも純粋に、

技術、道具の保存や顧客ニーズを生み出す人材育成に予算を投じてほしい。小・中学校の教育に伝統工芸に触れるような時間はないでしょう。それから売り手にも目を向ける。商品を扱える人材には知識が必要だけど、そういう人を育てる機関はないんです。

—— 森野先生は大学でやきものを教えるにあたり大事にしていることは何ですか？

森野 今、一番大事にしていることは、陶磁器専攻にきた学生にやきもの魅力をしっかりと伝えることです。僕は、誰よりもやきものが好きで、やきものに詳しい学生を育てたいんです。美術のことに詳しくなくてもいい、やきものに詳しい学生であれば。シンプルですが、これだけです。このことが社会に出た時にその子の最大の武器になり、自らが持つ社会的役割に活かしていけるんです。卒業後に陶芸作家になることなんてどうでもいい。現代美術のフィールドで活躍してもいいし、デザイナーになってもいい、教師になっても

いい、飲食関係でもいい、シヨップの店員でもいい。やきものの知識をしっかりとそれぞれの立場で活かしていつくれば、それでいいんです。あと、少し欲を言うなら、せつかく京都で勉強するのだから京都に拠って立つ京焼をしっかりと学んでほしいです。

—— やきものの魅力を教えてください。

森野 究極のやきものはご飯茶碗だと思う。安価で一番簡単に見えて初歩的段階で作るんですけど、技術的には奥が深くて難しいし、やきもの造形がすべて詰まっているものだと思う。やきものついでという造形は、球体のオブジェを作ったところで、中を空洞にしないと焼けないんです。必ず中に空間があるっていうことがやきものの絶対的な条件です。他の造形で中の空間を見せるものってなかなかなくて、器はそれに当てはまる数少ない形なんです。それから、みんな、お茶を飲む時でもご飯を食べるときでも手で器を引き寄せるでしょう。日本人とやきもの関係の近さ

がこの所作に現れてるんです。手の中で器を覆うように触れるのは、碗の形が成せるもの。コップには取っ手がついているから、器そのものに触れて引き寄せることはない。それに、自分だけの食器を使っている民族は世界的に見ても希有だと言えます。

—— こういった日本人の食文化の集大成がご飯茶碗に込められていて、オブジェであれ器物であれ、日本のやきものの源泉と

なっていると思います。やきものは日本人にとって、切っても切れない存在なんです。IT産業の300年後は想像も出ないほど技術的に発展し、これからも目覚しく進化していく。そんな中でも日本人はお箸とお茶碗でご飯を食べているだ



森野 彰人 (もりの あきと)

- 1969年 京都市生まれ
- 1995年 京都市立芸術大学大学院美術研究科修了 (財) 滋賀県陶芸の陶芸の森にて研究
- 2007年 京都市立芸術大学専任講師 (陶磁器専攻)
- 1998年 第5回 国際陶磁器展 美濃 '98 銀賞
- 2007年 平成 18年 京都市芸術新人賞

るう、と孫正義氏が語っていたんですが、僕もそう思います。やきもの作りは、その「変わらない」ものを時代に合せて作っていく、日本人にとって大事なものを作り出す非常に価値ある仕事だと思います。一人の作り手として、その変わらないことに非常に価値があるってことを世に示していける人でありたいです。

雅楽の演奏風景、いまむかし～琵琶篇～

この絵は、秋の夕暮れ、久しぶりに身重の中君のもとを訪れた光源氏の孫にあたる匂宮が、中君の心を紛らわせようと、琵琶を弾く様子を描いたものです。

『源氏物語』や『平家物語』など平安中期以降の古典文学に、雅楽の演奏シーンがたくさん描かれているのをご存じの方は多いことでしょう。特に、ギターのような4絃楽器「琵琶」を一人で弾いている場面はたくさん出てきます。

琵琶というと、現在の雅楽の中では“べべん”と1回と鳴らしてはしばらくじっとしたまま休み、また1回鳴らしてはしばらく休みといった音の鳴らせ方。それはまるで、日本の庭にあるシシオドシのよう。楽譜を見ても、全音符ばかりで、音が単発的です。

ところが、源氏物語の明石の君や百人一首で知られている蝉丸など、古典文学に登場する人物は、一人琵琶を弾いて、日々暮らしています。

果たして、シシオドシのような音を毎日一人で弾いていて楽しいのでしょうか？どこか腑に落ちませんね。



『源氏物語絵巻』宿木：琵琶を弾く匂宮



実は、平安時代の雅楽は、いまよりも相当、時間をギュッと凝縮して弾いていたと考えられています。このような説は、1950年ごろに、主に海外の雅楽研究グループが提唱し、今では定説となっています。

極端なまでに時間を凝縮して演奏してみると、どうなると思いますか？目からウロコ、でなくて耳からウロコ！どこか大陸風なメロディーラインが浮かび上がってくるのです。琵琶の演奏もメロディーだったからこそ、一人でも、飽きもせず楽しく弾いていたわけですね！

実際にどんな感じが聞いてみたいと思われた方は、ぜひ日本伝統音楽研究センターの講座やセミナーにお越しください。

(監修 日本伝統音楽研究センター非常勤講師 田嶽智志)

What's DEN-ON?

日本伝統音楽研究センター(通称：でんおん)では、日本の伝統音楽や芸能についての研究成果をさまざまな形で発信し、多くの方に理解を深めていただけるよう、どなたでも参加していただける講座やセミナーなどを定期的開催しています。

日本伝統音楽研究センター
ホームページ
<http://w3.kcuu.ac.jp/jtm/>

日本の音楽・芸能に関する一般書籍・古文献・楽譜・録音映像資料・楽器等を収集する専門図書室を備えています。どなたでも閲覧可能で、専門スタッフがお手伝いするレファレンスサービスもあります。是非、お越しください。

日本伝統音楽研究センター図書室 (新研究棟6階)

- ★ 開室日時
水・木・金曜日 10時～12時、13時～17時
- ★ 休室日
月・火・土・日曜日、祝日、入学試験期間中、年末年始
その他、棚卸及び保守点検等の必要に応じて休室することがあります。

学長 建島 哲

TATEHATA Akira

おもしろい京芸生が生まれる素

「おもしろい芸大生が生まれる素」というと、多くの人は一芸入試や奇想天外なカリキュラムを思い浮かべるかもしれないが、果たしてそうだろうか。私に言わせれば、むしろ話は逆であって、入試や教育の方法がユニークであることとユニークな人材を育成することとの間には相関関係がない、いや場合によっては相対立するものではないかと考えているのである。

めには、教育の方法はある程度オーソドックスであった方がいい。画学校の教師をしていた「ピカソのお父さん」がそうであったように、である。アートの限ったことではないが、型から自由になるためには、まず型を身に付けなければならぬ。独創性とか個性とかは、そこから先の話なのだ。

では芸大の教育は型だけ教えればいいのか、ピカソのお父さんでありさえすればいいのかという点、もちろんそんな単純な問題ではない。たしかに独創的な様式などというものは教えることができない。教えられるとすれば、それは自明の理として、もはや独創的なものではありえないのである。だが私は、様式ではなく創造のプロセスのレベルでなら、独創性に関して、芸大の教育ならではのオーソドックスなアプローチが可能だと思っている。独創性の学習は、単なる様式的な模倣で終わるものではなく、その表現がどのようにして生み出されたかというプロセスを学ぶことでなければならない。独創性とは、要するに、過去や同時代の様式との間に設けられた根源的な差異の謂いであるが、その様式がどのようにして生み出されたのかという差異の産出のシステムを学ぶこと。

ポロックの支持者であったアメリカの評論家、クレメント・グリーンバーグは同じことを「imitation of imitations」（模倣することの模倣）と述べているのだが、こうした思想は案外、論語にある温故知新という言葉に近い

のではないか。この「温故」は「ふるきをたずねて」と読み慣わされているが、私はやはり字義通り「ふるきをあたためて」と読むべきだと思う。それは過去を再度活性化させること、つまりそれ以前の状態からの差異として出現した過去の新しい力学を蘇らせることが、今日的な新しさにつながるという、いわば弁証法的なダイナミズムを意味しているのである。おもしろい芸大生が生まれる素にしては、いささかつまらない結論になってしまったようだが、まあ、反面教師もまた教師の使命のうちというのが歴史の教えるところだから、悪しからず。



芸大通信第15号から、誌面の構成を一新し、従前からの特集に加えて世界を舞台に活躍する学生・教員のインタビューや、日本伝統音楽研究センターの研究成果を紹介しました。また、リレーコラムも開始して、色々な角度から京都芸大に触れられる内容にリニューアルしました。

特に各分野の最前線で活躍する京芸生と教員の紹介は、「京都芸大の魅力は人にあり」と言われるところを多くの方に伝えられると思います。

京都芸大は、2012年4月に公立大学法人となりますが、より一層魅力ある大学として生まれかわってまいります。これから京都芸大を十分に味わっていただけるような大学広報誌を目指し、次の号に期待していただけるよう、誌面作りに努力してまいります。

芸大通信編集部一同

京都市立芸術大学

〒610-1197

京都市西京区大枝沓掛町 13-6

電話（代表）075-334-2200

FAX 075-332-0709

URL <http://www.kcuu.ac.jp/>



【最近のワタシ】
スマートフォン適齢期を過ぎて
スマホを押し売りされ、
悪戦苦闘中。



発行 京都市立芸術大学
京都市印刷物第233229号